

流通情報学部の今後の展開

流通情報学部長 矢野 裕 児

流通情報学部が開設された1996年は、情報化、IT化が進み、まさしくインターネットが私たちの生活に入り始めた時期でした。その後、インターネットが社会に急速に普及し、高度情報通信社会の幕開けとともに、物流も大きな変革を迎えることとなります。このような時期に誕生した流通情報学部は、「ロジスティクス」の考え方を柱とした非常に特色があり、同時に社会の新しい動きを見据えた開設であったといえます。流通情報学部の教育目的は、「ロジスティクスの考え方を核として、広い視野を持って経済・社会システムをデザインすることができる人材の養成を目的とする。」です。情報科学と流通科学の両者を有機的統合するという視点から、社会変化を先取りしたこれからの新しい社会の姿をデザインすることを目指していたといえます。本紀要をみても、その論文内容は流通・物流と情報など多様であり、学際的なものとなっています。

物流、ロジスティクス、サプライチェーンという言葉は、1990年代は、社会であまり注目されることはありませんでした。しかしながらその後、企業において、物流を戦略的に捉えるという考え方が浸透し、ロジスティクスという言葉も日常的に使われるようになりました。さらに、2011年に発生した東日本大震災において、物流が私たちの生活を支えていること、2013年頃からドライバー不足が深刻となり宅配危機、物流危機ということが良く聞かれるようになるなど、物流、ロジスティクス、サプライチェーンの重要性が社会でも認識されるようになってきています。

流通情報学部が開設されてから、四半世紀が経過しました。これまで進んできた情報革命から次の新しい社会の姿が模索されています。日本政府は、狩猟社会（Society1.0）、農耕社会（Society2.0）、工業社会（Society3.0）、情報社会（Society4.0）に続く、未来社会の姿として、Society5.0を打ち出しています。Society5.0によって実現する超スマート社会を「必要なもの・サービスを、必要な人に、必要な時に、必要だけ提供し、社会の様々なニーズにきめ細かに対応でき、あらゆる人が質の高いサービスを受けられ、年齢、性別、地域、言語といった様々な違いを乗り越え、生き活きと快適に暮らすことのできる社会」としています。前半部分の文章は、ロジスティクスで使わ

れる5R(right items,to the right place,at the right time,in the right condition,and at the right cost)と全く同じと言っても良いといえます。すなわち目指すところは従来のロジスティクスと同じですが、どのようにして実現するかが違うといえます。現在のロジスティクスは、フィジカル空間（現実空間）が中心で、一部サイバー空間（仮想空間）が入った段階であり、物と情報が連動することはあるものの、物の状態がリアルタイムで常に管理されているわけではありません。それに対して、これからのロジスティクスは、サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより実現するものであるといえます。現在、人はスマホなどによってインターネットとつながっています。今後はIoTといわれるように、物と情報がつながり、リアルタイムでその状態が把握、管理され、さらに人、物、サービスすべてが情報でつながることとなります。大量のデータ、情報を収集・蓄積し、AIにより識別、情報として整理し、可視化、見える化によりバーチャル化します。その情報を分析して、サイバー空間上で予測、最適化をし、それに基づいて現実の世界で実施することとなります。

流通情報学部のカリキュラムは、ロジスティクスを柱とし、流通総合、物流、情報で構成されています。流通科学、情報科学を広く学べると同時に、産学連携プログラムを含めた体系的なカリキュラムとなっています。国土交通省国土交通政策研究所は、2019年度、2020年度に「物流分野における高度人材の育成・確保に関する調査研究」を実施しました。そのなかで、物流・サプライチェーン分野に特化したコース、カリキュラムを設置している大学の状況を調査しています。欧米、中国などでは多くの大学が該当するコース、カリキュラムを持っているのに対して、日本では本流通情報学部と東京海洋大学だけであると指摘しています。このように極めて特色あるカリキュラムである流通情報学部を、今後、さらに発展させていくこと、そして社会に広めていくことが課題となっています。

現在、新しい社会の姿として提示されている Society5.0の考え方は、本学部の情報科学と流通科学の両者を有機的統合するという考え方がまさしく合致するところです。学部開設から四半世紀が経過し、新しい取り組みとして、カリキュラムの中で両者をより融合させたかたちにし、新しい社会の姿をデザインできる人材を育成していくことを目指しています。